

対談

墓の語る

〈現代の死〉

〈司会〉大谷栄一

おたに えいち

井上治代

いのち はな

鈴木岩弓

すすき いわゆみ



現代宗教(年刊)

A5判 定価2310円

2001 【特集】二一世紀の宗教

対談●ポストモダン社会と宗教☆星野英紀×大村英昭／対談●現代宗教と女性☆野村文子×川橋範子

エッセイ●神道神学の可能性☆上田賢治／エッセイ●死を受け入れる生き方☆脇本平也

インタビュー●日本のペンテコステ運動…弓山喜代馬師に聞く

論文●仏教教団と葬祭儀礼☆佐々木宏幹／●地域に根ざした宗教は可能か？☆島蘭進／●宗教・宗教性・霊性☆伊藤雅之／●チベットの活仏と中国の宗教政策☆広池真一／●ユダヤ教と原理主義の未来☆口杵陽／●新世紀の宗教☆手戸聖仲／●宗教における暴力と平和☆堀江宗正／●イギリスの新宗教と社会☆稲場圭信／●統計に現れた日本人の宗教性の現実☆石井研士／●宗教運動への研究視座「アメリカの創価学会を読む」☆大谷栄一

2002 【特集】宗教・スピリチュアリティ・暴力

対談●日本人の霊性と現代☆鎌田東二×町田宗鳳／対談●越境を生きる☆金 縷×黒木雅子

エッセイ●オウム事件以後の日本宗教☆山折哲雄／エッセイ●私の宗教観☆田丸徳善

インタビュー●『地球交響曲』と霊性…龍村仁監督に聞く

論文●宗教と暴力☆芦田徹郎／●現代イスラームと女性☆塩尻和子／●「イスラーム的共存」の可能性と限界☆池内忠／●アメリカン・ナショナリズムと宗教☆立田由紀恵／●慰霊と暴力☆西村明／●現代フランスのスピリチュアリティ☆櫻尾直樹 現代沖縄にみる霊性☆佐藤壮広／●スピリチュアル・ケアと宗教☆薄井篤子／●神社神道と社会福祉☆櫻井治男／●警戒される「宗教」と維持される「宗教性」☆井上順孝／●丸山真男と宗教史☆遠藤潤／●現代宗教社会学の論争についてのノート☆小池靖

2003 【特集】宗教・いのち・医療

対談●生命倫理の最前線☆柘植あづみ×波平恵美子×小松加代子／対談●宗教と生命倫理

☆ホアン・マシア×伊藤道哉

エッセイ●「いのち」と「生命」☆村上陽一郎

論文●いのちの始まりをめぐる欲望と倫理と宗教☆棚島次郎／●二つの「いのち」という戦略と陥穽☆池澤優／●現代の医療とスピリチュアリティ☆安藤泰至／●人工生殖時代の朝鮮儒教☆淵上恭子／●現代社会における胎児の生命観☆星野智子／●臓器移植と現代の神話☆渡辺和子／●「生きる力」のユートピア☆山中弘／●現代医療における「心」と宗教☆石川都／●病院のチャプレンとスピリチュアリティ☆古澤有峰

東京堂出版

司会 グローバル化や情報化の進展に見られるように、現代社会は変化の激しい時代です。その変化は、人間の死のあり方にも反映しているのではないのでしょうか。今日は「墓の語る〈現代の死〉」と題しまして、鈴木岩弓先生と井上治代先生に、現代日本社会の墓や祭祀・葬送の文化を通して見える現代の死の特徴についてお聞きしたいと思います。お二人の先生は豊富な調査経験をお持ちでいらつしやいますので、その調査データもお示しいただきながら、お話していただければと思います。

最初に、お二人の先生に自己紹介も兼ねまして、これまで先生方が取り組まれた調査の内容や成果をご紹介いただけますでしょうか。

■生者と死者の接点から見える死生観

鈴木 私の特長は宗教学です。宗教学はその幅が広い学問ですが、私自身はどちらかというと実証的な研究をしてきました。この頃は「宗教民俗学」という言い方をすると皆さんなんとなく分かってくださるようですので、そのように言うことが多くなりました。宗教学の対象と

する「宗教」は、この世と異なる不可視の世界、口に見えない世界と大きな関わりをもちます。そのような世界を考えて行く中で、私はとりわけ、「死」という問題に関心を持っております。つまり、「死んでしまえばおしまい」と言えば、それでおしまいかもしませんが、死んだ後にも不可視の世界があると考えることで、これまでの人間の宗教的文化がある程度培われてきたと思っています。そのような意味で、「死」の問題が、私の宗教研究の一つのテーマになってきたわけです。

死の問題を見ていくとき、先ほど述べました不可視の世界とこの現実——彼岸と此岸、あの世とこの世と言ったり、色々と言いつ方はあるとは思いますが——その両者の接点にとりわけ関心をもってきました。例えば、仏壇や寺や墓、霊場、あるいは死亡場所、そういった死者と生者が関係を持つ接点を手がかりに調査研究をしてきました。その際中心となったのは、人は死後の世界をどう観念するのか、どう思っているかという観念の問題でした。つまり、見えないはずの世界だけれども、死後の世界について人はそれぞれに何か考えているわけです。ミ

クロに考えていったら十人十色ということになってしましますが、時代時代において何となく似たような方向が結果として出てきている。群として見るなら、あるひとつの傾向性が窺えると思います。そういう死後の世界や死生観と言われるようなものが時代と共にどのように変化してきたのか、そういうことに関心をもって研究してきました。ただ、そのような観念について調査するとき正面から人に「あなたは死後の世界をどう考えますか」と訊いても、なかなか難しいことです。思い返してみる



鈴木岩弓氏

と、大学院生の時期、R・J・スミスの位牌の調査（『現代日本の祖先崇拜』御茶の水書房）を読みました。それまでの研究者は「先祖とは何か」ということを「あなたにとっての先祖とは誰ですか」と正直に訊いていました。しかしスミスは正面突破するのではなく、日本人が先祖を祀る時には位牌を拜んでいる。ならば位牌に祀られている人が誰かを明らかにすれば先祖が誰だか分かるであろうとして、日本人の先祖観を探っていたのです。つまり現実のモノを通じて不可視の観念を把握するというスミスの手法が、ちよつとした「目から鱗」という感じでした。その後、スミスに刺激されて位牌の調査をやったり、その延長として、墓碑銘の変化を調査したり、『中央公論』のような出版物の中で死がどんな風に扱われてきたかなど、ミクロなものからマクロなものまでひっくるめて死生観の調査をしてきました。また今年の二月から六月にかけて、全国規模の意識調査を科研費の共同研究としてやっています。このように、定性的な調査と定量的な調査を併用する中から、現代日本人の死生観の変化を把握しようと言うのが、目下の研究課題です。

■家族変動と墓の関係をめぐって

井上 今お話を聞きましていて、私の研究と似ているところが多々あると思いました。「モノを通じて見えないはずの観念を見る」という具体的な手法は、私も同じです。私は若い頃から死ということに関心がありました。といっても死の先にある不可視の世界に興味があったのではなくて、人生の帰着は死といいますが、究極的には死ぬために生きている人間というものに非常に興味があ



井上治代氏

りました。最終的に死んでしまう人間が、そのことをわがかりながら生きていく過程で死や人間関係をどう観念するのか。結局私は宗教というよりは第一義的に人間に興味があるのですね。

ですから私の宗教研究は、既成宗教の教義や教団から入るのではなく、社会変動にもなつて変容する社会的人間の関係性や、人間が抱く意識や観念を知るところから入っていきます。そういった入り口から入ると、広義の宗教、宗教の拡散化、宗教的なものも視野に入れることができます。具体的には人々の日常の行為や現代社会に起こっている問題、また人々の作ったモノを通じて実証的な調査を行うわけですが、それによって現代人の意識の変化が捉えられ、広義の宗教の実態と変容がわかります。さらには仏式の葬儀が九割という日本人の葬祭を通じた既成教団との関わりから伝統仏教の変容の一面面もとらえられます。つまりそこで得た知見で一部の既成宗教研究にも接近できるというわけです。

M・フォーテスも先祖祭祀研究で二つのアプローチをあげていますが、私のそれは、宗教学的というよりは、

社会構造的アプローチです。伝統的な靈魂観・他界観が、若者をはじめとした人々の中で薄れているという傾向がある時には、宗教学的なアプローチだけでは捉えきれないものが出てきているのだろーと思ひます。そのような時には、社会構造的なアプローチが有効なのではないか、あるいは宗教学的なアプローチを補うような一つのアプローチになるのではないかと考えています。例えば今でも日本では墓参率七〇八割をキープし、お盆には人口の大移動が起きていますよね。それを戦前と変わらぬ高い先祖崇拜と解釈していいものだらうか。夏休みのファミリーイベントではないのかとか、故郷に親を置いて都会に出た子世代の顔見せの儀式だとか、宗教学的とは違うアプローチからも見ていくということをしてきました。

とくに私は、戦後の家族変動に興味があります。お墓などは家のシンボルとして存在していましたので、脱「家」過程といいますが、お墓の「家的なもの」がどのようなにして抜けていくかを実証的に調査することに興味を持って色々な調査をしてきたわけです。

鈴木 墓というのは、私の考えでは一つのタイムカプセルのようなものです。造墓時に選択した墓の形態や記載した文字というのは、墓建立者のさまざまな意識を反映したものと考えられるからです。有難いことに、多くの墓石には建立年月が書かれますから、個別の墓の情報を建立年月別にソートすれば、時間軸の中にその変化を位置付けることができると考えたのです。当時、墓の研究者の多くは「墓が変わってきた」と言いはするのですが、数の上で実証的に示したものをあまり見たことがなかったのです。印象論なら誰でも言えるわけですが、実際どうなのかをきちんとやらなくてはいけないということで、一九九〇年代半ばに仙台の市営墓地と民営墓地で墓石の悉皆調査をしました（『墓が語る現代——仙台市葛岡墓園の場合』、『東北文化研究室紀要』三八集、『墓が語る現代（二）——仙台市における民営共同墓地の場合』、『東北文化研究室紀要』四〇集参照）。

あくまでも仙台の市営墓地と民営墓地という条件付きではありますが、そういうものを見ていく中で、家の問題で言いますと、家名を書かなくなってくる傾向がうか